

変わる日本の「暮らし」と「まち」

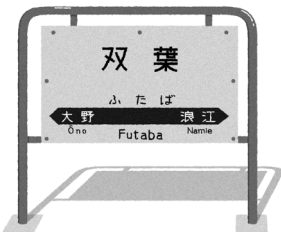
illustration: Shigeyuki Sakata

新生双葉町に向けて 住む拠点づくりがスタート

福島県双葉町
双葉駅西側地区一団地の
復興再生拠点市街地形成施設事業
(2018年●平成30年)

阿部民子

text by Ranko Abe



秋とは思えない汗ばむ晴天となった10月1日。東京電力福島第一原子力発電所事故による全町避難が続く福島県双葉町の中心部で、町民帰還への足がかりとなる起工式が執り行われた。

田中和徳復興大臣をはじめ、国や県から多くの来賓が臨席するなか、伊澤史朗双葉町長は「帰還困難区域であっても、避難指示を解除し、再び居住を目指す区域として特定復興再生拠点区域(復興拠点)を定め、このJR常磐線双葉駅西側を中心とする地区を町の居

住再開の要として位置付けました。帰還を希望する町民が約1割にとどまる現状ですが、新たな双葉町のスタートを切る地区として、多様な人々が共生し、規模は小さくとも豊かに暮らせるまちにしたい」と挨拶。

続いて、事業を受託したUR都市機構の中島正弘理事長が「長年まちづくりに関わってきた組織として、プライドをかけて施行していきたい」と述べ、続く囲み取材でも「町民の方一人ひとりの復興への思いを大切にして、じっくり

と取り組みたい」と工事着手の抱負を語った。

復興拠点内初のまちづくり

福島県原子力災害被災12市町村で、唯一全町避難が継続している双葉町。しかし、取材に訪れて驚



復興再生拠点となる西側地区と開業に向けて工事が進むJR常磐線双葉駅(写真右)

企業を誘致して新しい産業を生み出すとともに、2020年内には復興の歩みを発信する「東日本大震災・原子力災害伝承館(アーカイブ拠点施設)」や、就業者や来訪者をサポートする「双葉町産業交流センター」の供用開始が予定されている。

交通再開への歩みも着々と進んでいる。今年度末には、常磐自動車道常磐双葉ICが供用を開始予定。さらに、同時期にJR常磐線が全線再開見込み。それに併せ、避難指示解除準備区域とJR双葉駅周辺等の一部区域の避難指示解除、2022年春には復興拠点全域の避難指示解除を目指し、各地で工事が進んでいる。

なかでも、今回着工されるJR双葉駅西側地区は、町で初めての「住む拠点」だ。まずは約23.9ヘクタールのうち、第一地区として12.3ヘクタールを造成、2022年の居住開始を目標に掲げている。双葉町復興推進課の田中聖也さんは「この地区は、双葉町に再び人が住める環境を作る中核となる拠点です。公営住宅88戸や分譲地、商業施設や医療などの生活関

連サービスの整備を予定しています。帰還を希望される方や避難先との二地域居住を希望される方、また中野地区で就業される方など、新たな住民の方々が近くに集まって住み、コミュニティを形成できるコンパクトなまちづくりを図りたい」と計画を語る。

しかし、地震、津波、原子力災害の複合災害を経験し、住民がゼロになった地の復興は、並大抵のことではない。双葉町は新しいまちづくりのパートナーとして、ニータウン事業や復興まちづくりの経験、技術力が豊富なURに事業を委託。手を携えて復興に立ち向かっている。

UR双葉復興支援事務所長の森脇恵司は、宮城県女川町での震災復興事業を経験しての赴任だ。先行している中野地区の基盤やインフラ整備に続き、双葉駅西側地区でも基盤整備をはじめ宅地や道路、駅前広場の整備など、これらの町民の生活や生業の下支えとなる施工を担う。

「スピードが命だった津波被災地に対し、当地での事業の難しさは、つくった土地がうまく活用

地方創生のモデルシティに

これから先の未来へ続く、持続可能な町に新生するために、何をすべきか。起工式で、町長が「新たにつくり上げるまちだからこそできる先進的な取り組みにチャレンジしたい」と述べたように、町は意欲的な取り組みを次々と打ち出している。

その1つが、地区全体で再生可能エネルギーの自家発電及び自家消費を行う、エネルギーの地産地消だ。また、防災に強いまちづくりを目指し、駅西側地区では電柱

地中化も実現する予定だという。

田中さんも「震災から8年以上が経過し、町民の方々の避難先での暮らしも長期化するなか、ただ元に戻すだけでは町の発展は望めません。ここでなければできない、世界に先駆けた地方創生のパイオニアとしての取り組みもしていきたい。たとえば、高齢者の方も自由に移動できるような自動運転のフィールドづくりなど、どんな新しいものにチャレンジしていければ」と話す。

森脇も「まずはJR常磐線再開に向けた双葉駅東口の駅前広場の整備。それと並行して、2022年春の居住開始に併せた基盤整備に向け、総力を挙げてまちづくりをサポートしていきたい」と意気込む。

「再開するJR常磐線の車窓から見た人が、住みたいと思うまちにしたい」と起工式で語った伊澤町長。来春、窓の外に広がる新生双葉町の姿に期待したい。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社